



# MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

12

1999.3.31



【上吉田上宿の道祖神】



【西丸尾の道祖神】

## 富士吉田 あれこれ

### 自治会の神

富士吉田市域では、江戸時代の8ヶ村の村名がそのまま現在まで大字の地名（下吉田・上吉田・大明見・小見明・上暮地・新倉・松山・新屋）として生きています。また、それぞれの村を構成していた江戸時代の村組（古屋組・新田組など）の多くは部落とも呼ばれ、さらに昭和20年以降は、新たに町会名（富士見町・旭町など）が付され、おおむね現在にみられる自治会として再編されました。現在、市域には32の自治会がありますが、部落という言葉は今でも自治会の別称として使用されています。

昭和30年以降、人口の増加に伴い、丸尾（富士山の溶岩台地）の上を開発し、新たな集落が次々と形成されていきました。これらの集落は住宅地として成立しており、主に勤め人で構成され、市外からの来住者も多くみられます。また、これら新開地にも町名が付され、自治会として独立しましたが、旧来の部落と新開の部落では、その成立事情とともに成員構成および住民の意識が大いに異なっています。しかし共通する部分があります。それは両者ともに道祖神を祀っていることです。

現在、近世の村が意識される機会の一つは、村氏神（浅間神社など）の祭祀と考えられます。自治会（部落や村組）が異なっても、村

氏神の祭祀組織は大字（近世の村）ごとに完結していますが、それに対して十五日正月（小正月）の道祖神祭は、自治会ごとに行なわれているのが特徴です。

富士吉田市域で最古の道祖神の石碑は、上吉田上宿のもので、江戸時代の元文5年（1740）に建てられています。一方、最も新しいものは、新開地の西丸尾自治会が建てた昭和53年（1978）の道祖神碑です。戦後30年を経てもなおこのような神が新しく祀られるのは、いったいなぜなのでしょう。

市域では、道祖神はサイノカミ・セエノカミとも呼ばれ、道の神、縁結びの神、生産の神、火の神とされ、小集落（部落）で祀る神としての性格があります。道祖神は江戸時代においても村が分立すると必ず祀られ、道祖神を持たない部落は一人前の部落とは認められないとする意識さえありました。その伝統は戦後においても明らかにみられ、新しい自治会が成立すると、自治会の結束を固めるために、石碑を建立し道祖神祭が行なわれています。将来、新たな自治会が成立するとしたら、必ず道祖神を祀ることでしょう。なぜなら市域において道祖神は自治会の自立・統合のシンボルであり、また自治会を守る神と信じられているからです。

## ▼博物館レポート

## 新倉の歴史を探る(後)

## はじめに

富士吉田市の西側、御坂山地の山すそに位置する新倉地区は、富士山の噴火による溶岩の流出によって多大な影響を受けた場所でもありました。

今回は、そうした新倉地区の形成やその後の村落の成立について紹介しましたが、今回は、新倉地区に残された史跡などを紹介し、

## 新倉掘抜

剣丸尾溶岩流の台地上にある新倉村は、水なし村とも呼ばれ灌漑や生活用水を得るのにも困難なところでした。一方、山を隔てた河口湖には水のはけ口がなく、豪雨のたびに水位が上がり、周辺の地域は度々水による被害を受けていました。

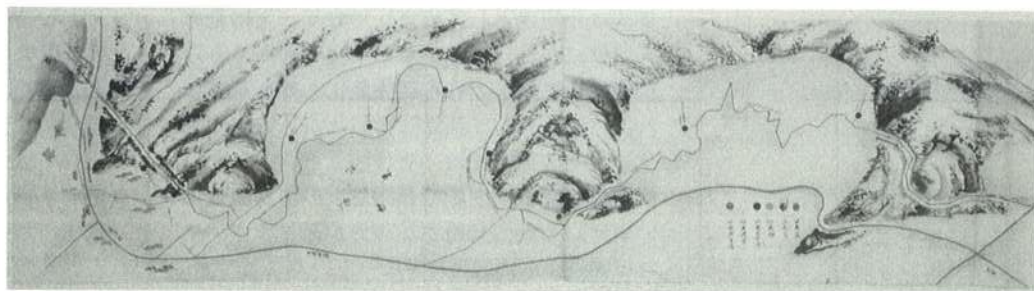
そこで、両地域の間にある嘯山うそがきやまにトンネルを掘って水を流し、新倉・河口双方の問題を解決し、さらには河口湖の減水による湖畔の開拓と用水を確保した新倉村の新田開発を目的とした工事が、元禄年間(1688～1704)当時の郡内領主秋元但馬守喬知あきもと だまのり かつらぎによって計画施工されました。これが後に新倉掘抜と呼ばれる工事です。この工事に関する史料は極めて少なくその全容はわかっていませんが、残念ながら成果を上げることは出来なかったようです。その後、享保・文化年間に何度か再工事が計画されましたが、結局着工には至りませんでした。弘化四年(1847)、元禄年間に掘られた穴が偶然発見されると、新倉村の人々は村の単独事業じぶしん(自普請)として古穴の修復工事に取りかかりました。そして、膨大な経費と労力負担など大変な苦勞の末、嘉永六年

溶岩台地開拓の歴史と人々の精神的な抛りどころでもある神社・仏閣の由来や信仰の移り変わりなど、この地域ならではの歴史的な特徴について明らかにしていきたいと思います。



【新倉掘抜】

(1853)には通水し二町歩(約2町)の開田に成功しました。しかし、翌年には河口湖の減水と穴の崩落により通水不能となり、資金不足から修復工事はなされませんでした。その後、文久三年(1863)村の医師永嶋元長が私財を投じて再修復工事を呼びかけ、それにより工事が再開、慶応元年(1865)には再び通水して約二十町歩(約20町)の開田に成功しました。秋元氏による工事から実に170年余りの歳月を経てようやく新倉掘抜は完成することとなったのです。



【新倉掘抜絵図 (慶応元年)】

## ▼博物館レポート ～新倉の歴史を探る(後)

## 新倉浅間神社

完成当時の「出来形帳」によると、掘抜の延長は約4 km、人足十万余人、工費約七千四百両とあり、当時としてもかなりの大工事だったことがわかります。新倉掘抜は手掘りのトンネルとしては日本最長であり、また、村が自普請として起工し完成させたことは注目すべきことだと言えます。新倉掘抜は、大正二

新倉地区の村氏神である富士浅間神社は新倉浅間とも呼ばれ、木花咲耶姫命・大山祇命を祭神として新倉（古屋敷）の東側尾垂山の尾根に祀られています。ここの地名は宮林と言い、神社の下の山すそは宮の下と言います。由緒書によると、この浅間神社は慶雲三年（706）の創建で、大同二年（807）には天皇より「三国第一山」の勅額を賜ったとも伝えられ、市内で最も古い由緒をもつ神社です。吉田の火祭りとして有名な上吉田の北口本宮富士浅間神社の鎮火祭に出す富士山形の大きな神輿はもともと新倉浅間のもので、祭りの際に新倉村民が上吉田へかつぎ出していたのですが、江戸中期には行われなくなり代わって「雪綿」と名付けた真綿を贈るようになりました。また、新倉掘抜による莫大な工事費用の一部を浅間神社境内の木を売ることによって補ったことなどが当時の記録に残っています。

浅間神社本殿の左後方には「ゴインキョサ

## 新倉三カ寺

入山川南岸の溶岩台地末端に正福寺・如来寺・大正寺の三カ寺が並んでいます。これらは新倉三カ寺と呼ばれ、いずれも戦国の頃より浄土真宗の寺院となりました。近世初頭には当時の郡内領主浅野氏の庇護を受け、真宗本山の門主（主僧）の来訪を受ける寺でもありました。また、三カ寺とも富士山信仰と関

## 新倉山正福寺

正福寺は、その寺記「万亀鑑」によると大同二年（807）に弘法大師空海の弟子の道海が、阿の山に富北院と称する堂を建立したのが始りだと伝えられています。この時、道海は弘法大師から富士宝印（護符）と八葉九尊像（富士山の本尊）を賜ったと言われ、現在もその由緒をもつ版木が残っています。

安貞二年（1228）には九世道祐が親鸞聖人

年（1913）山梨県により掘削されたトンネルの完成によってその役目を終えるまでの約50年間、新倉村の新田開発に大きな役割を果たしました。そして、現在新倉掘抜は市の史跡に指定され、当時の人々の偉業を今に伝えていきます。



【新倉浅間神社】

マ」と呼ばれる荒浜神社が祀られています。この荒浜神社はかつて小舟山の西側が小舟湖と呼ばれる湖だったときそのほとりに祀られていたといわれ、その後、尾垂山の中腹に祀られるようになって中尾神社となりました。この中尾神社が後に浅間神社と命名されたことと伝えられていることから浅間神社の前身にあたる神社と考えられています。

係が深くかつては山小屋を持ち、登山者に御札を配布していました。三カ寺には市の文化財に指定されている優れた建造物も多く、当時の繁栄ぶりを今に残しています。



【新倉山正福寺】

## ▼博物館レポート ～新倉の歴史を探る(後)

に帰依して浄土真宗に改宗したとされ、阿の山から現在の新倉字道祐に移り真宗道場を構え、その後近世の初めに正福寺と改号し現在の地に移りました。そして元和六年（1620）には本堂が造立されました。現在の本堂は享保十年（1725）のものですが、本堂の内陣は桃山式の華麗な様式となっています。

また、経堂は明和年中（1764～72）に建造

## 大原山如来寺

如来寺の創建当時は真言宗の寺で教願寺と称し、堂ヶ尾（現在の字堂面）にあったと言われています。一時期時宗の念仏道場となっていたようで、如来寺には遊行上人の書状が今も伝えられています。安貞二年（1228）親鸞聖人がこの地を訪れたという伝承がありますが、当時の住職玄教は親鸞聖人に帰依して法名を浄円とし、弘長三年（1263）には浄土真宗に改宗、後に寺の名も法性寺と改号されました。

宝徳三年（1451）には、武田源氏の穴山弥九郎信懸の子信正が新倉村に住み、出家して法性寺に入寺しました。その孫の清右衛門光重は文明年中（1469～87）蓮如上人の弟子となり、重房浄欽と称し、それから四世後の浄宗の時万蔵寺と改号、さらに正徳三年（1713）には本願寺の直末となり大原山如来寺と改号されています。

かつて如来寺は富士山に山小屋を持ち聖徳

## 宝松山大正寺

大正寺は、文安年中（1444～49）市内新屋の城山城主であった遠山伊豆守藤原重正が蓮如聖人に帰依して出家し、新倉村字宮ノ下に水石山新念寺を開山したのが始まりだと伝えられています。後に新念寺は焼けて三世正念の時に新福寺と改号しました。そして四世西念の寛永四年（1627）に再び焼失、場所を現在の地に移し五世正意の寛文八年に宝松山大正寺と改号しています。大正寺の鐘楼は、文化十年（1813）に十二世正観が創建したもので、市の文化財に指定されています。鐘楼の中床の下には甕が上向きに埋めてあり鐘の音響効果を上げる工夫が施されています。

また、庭園は文化年間（1804～18）に徳川将軍家の庭師石斎によって造られたもので、富士山の溶岩を自然に配した造りになってい

され、その内部には寛政六年（1794）に造られた八角輪転経蔵があり、回転式の蔵の中には一切経・黄蘗慈經五千七百巻が納められています。現在、正福寺の本堂、経堂・八角輪転経蔵は共に市の文化財に指定されています。



【大原山如来寺】

太子を祀っていましたが、如来寺の境内にある太子堂は、この当時富士登拝を禁じられていた女の人たちが富士山を拜むための遥拝堂でもありました。



【宝松山大正寺】

ます。この庭は市の名勝に指定されていますが、中国廬山にある古跡「虎溪」を模していることから「虎溪の庭」とも呼ばれています。

## ▼博物館レポート ～新倉の歴史を探る(後)

## 聖徳山福源寺

福源寺の所在地は下吉田の字法華堂です。ここはちょうど新倉村と下吉田村の境にあたる場所でした。

寺の由緒書によると、かつてこの寺は現在の下吉田東町にある浄土三部経塚（お経塚）の付近にあって、聖徳寺と称する真言宗の寺でした。

安貞二年（1228）親鸞聖人がこの地を訪れた時、真言宗から浄土真宗に改めたと言います。その後下吉田の渡辺伊賀守の子が蓮如上人に帰依して浄光と名乗り、寺の名をサグジ道場とし、後に聖徳山福源寺と改名しました。現在の地に移ったのは享保九年（1724）頃のことです。

福源寺にある太子堂は、享保九年に建立され、法隆寺の夢殿を思わせるような六角形の美しい建物で、地元の大工によって三日三晩で建てられたと伝えられています。堂の中に



【聖徳山福源寺】

は聖徳太子の木像と太子16歳の時の肖像画が安置されていますが、この肖像画は太子が富士山を訪れた時に自画像を三幅描き、その内の一幅を残したものと伝えられます。この太子堂も市の文化財に指定されています。

## おわりに

今回のレポートでは、新倉地区の歴史とそれに関わる史跡・文化財について紹介しました。これらは新倉地区の歴史を語るうえで不可欠なものであり、新倉地区のみならず市域全体の歴史にも深く関係するものと言えます。しかし、今回紹介できたのは新倉地区内の史跡のほんの一部にしか過ぎません。私たちのまわりには各家で祀る小祠に始まり、地域で祀る神社、道祖神や道標、記念碑などたくさんの史跡が今も残されています。こうした小さな史跡の一つ一つが、私たちの過去の歴史を知る上でたいへん貴重なものとなって

いるのも事実です。

今回のレポートは、私たちの身近にある史跡や文化財について、地域の歴史との関わりを知り、その価値を改めて理解していただくことで、一人一人が大切に保護し後世へ伝えようという意識を持っていただくことを目的としています。

これを機会に、身近な史跡の由来などを調べてみるのも、私たち一人一人のルーツを探ることができて面白いかもしれません。

<当館学芸員 齊藤 智子>

主な資料及び参考文献：

『富士吉田市史』第3巻 近世Ⅰ, 4巻 近世Ⅱ

『富士吉田市史研究』第4, 5, 7号

『指定文化財』富士吉田の文化財その24

『下吉田の民俗』富士吉田市史民俗調査報告書 第十集

『甲斐国 社記 寺記』第1巻神社編, 第4巻寺院編

## ▼博物館レポート

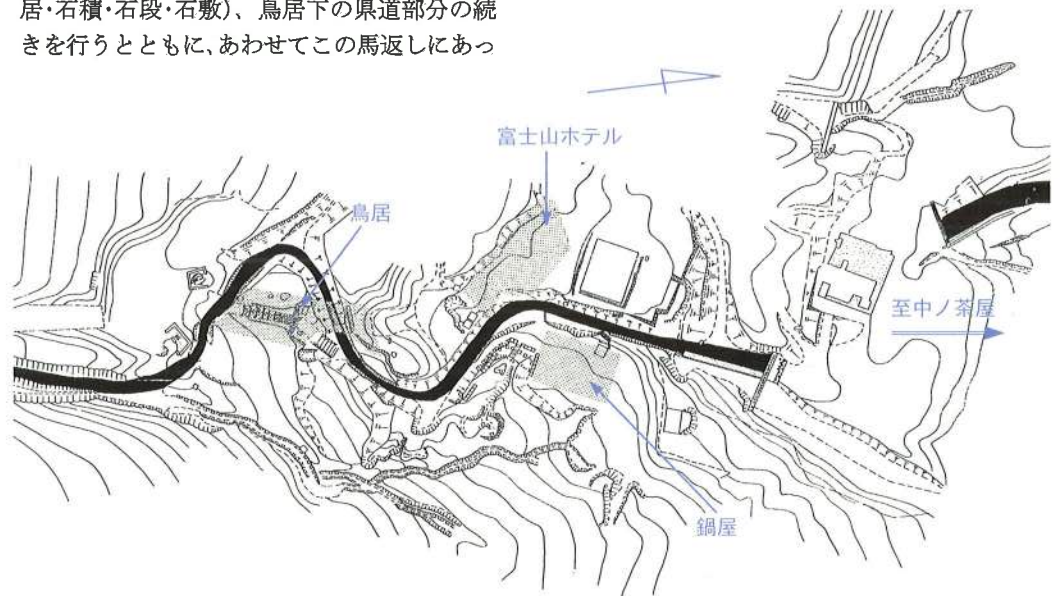
## 登山道発掘調査近況報告③

## 調査の概要

平成10年度に実施した登山道の発掘調査の成果を紹介します。今年度は前年に引き続き「馬返し」地点の調査を7月21日から11月17日までの約4ヶ月をかけて実施しました。調査範囲は前年度に手がけた鳥居周辺部（鳥居・石積・石段・石敷）、鳥居下の県道部分の続きを行うとともに、あわせてこの馬返しにあっ

た山小屋等の施設跡を確認するための調査も行いました。

また、鳥居部分については復元保存工事の一環として、鳥居本体の解体が行われた際に鳥居の設置状況を観察することができました。



【調査範囲図】

## 鳥居部分の調査

昨年度の調査段階では、鳥居周辺部分の清掃及び一部掘り下げを行ない、現時点での遺構の状態を記録にとりまとまりました。今回の調査では石積や石段、石敷の構築状況を観察するため遺構を断ち割って掘削を進めることから始めました。石敷、石段部分については南北にトレンチを設定し、断面による観察を行い、どのように石が使われているのかを確認しました。両壁をなす石積の幅で設置されている石段は1段につき3ないし4つの長方形の切石を一列に並べ階段石としていますが、石積側両端の階段石が両側ともに斜めに配置されており、中央部分の階段石が鳥居方向（北側）に張り出しているように見られます。階段石のこうした並び方は全7段の石段に見られ、張り出しの形状も揃っていることから後の修復によるものとの見解もありました。しかしながら、実際に石を外してその下部を観察してみたところ、若干の粘性土が見られただけで、地山であるスコリア層の上に設置されただけの状態であることがわかりました。このことにより、地山が動きやすいスコリア層であったため、全体的に中央部

分が押し出されたその結果、現状にみられる形状になったと考えられます。

石積は構築状況を調べるため、崩落している東側の一部にトレンチを再度設定して掘削を進めたところ、石積が作られた造成面は石積の壁面より更に奥に2m程掘り込まれていることがわかりました。

鳥居本体については、前回の報告で柱だけが残されており、笠や貫がなく、その沓石に使用されているものは銘が刻まれており、何らかの石造物を転用したものと紹介しました。今回、解体工事によって鳥居の柱や現在の沓石を撤去した際にその下部まで観察するこ



【石段・石敷の調査状況】

## ▼発掘調査報告～登山道発掘調査近況報告③

県道下部の  
調査

## おわりに

とができ、鳥居が構築された状況が明らかになりました。現在の沓石のさらに下から鳥居本来のものと考えられる1m四方の礎板(台石)が検出されました。西側の礎板には、ほぼ中央に柱の径と合致するホゾ穴が確認されましたが、東側の礎板には同様のホゾ穴はなく、また西側のホゾ穴そのものも深さ約5cm程と非常に浅いもので柱を安定させることができないものでした。また、この礎板の下には根固めのための石(30～50cm大)が多量に入れられ、突き固められていました。この根固め石が入れられていた掘り込みは2m程あり、その鳥居の重量を考慮した規模であることが窺えます。

石敷については石段同様に石材を外して設置状況の確認をしました。敷石の下には若干の粘性土と石の水平をとるために入れられたと考えられる破碎礫が確認されている他は、遺物として陶器片が数点と古銭(寛永通宝)が比較的多く出土しています。

また、西側の礎板の50cmほど南に直径約

前年度、鳥居下(北側)の県道部分を掘り下げ、多量の礫を検出しましたが、今回の調査においても引き続きこの箇所の調査を進めました。礫を外しながら慎重に掘削を進めたところ、旧登山道の階段と考えられる石列が一段検出されました。この石段は幅2m程で鳥居の石敷の幅とほぼ同じ規模のものです。検出された明確な石段は一段のみですが、周辺にも階段に使用されていたと考えられる切石が確認されています。また、検出されていた多量の礫は現在の登山道(県道)を造成した際に入れ込まれたものと考えられます。

今回の報告では紙面の都合もあり、調査内容の全てを紹介することはできませんでした。このほかにも鍋屋跡や富士山ホテル跡といったかつての馬返しにあった山小屋の施設跡や一合目までの旧登山道の調査も行い、多くの成果が得られています。

調査後、鳥居周辺部の修復保存工事が行われ、現在ではきれいに整備された鳥居をみる



【鳥居礎板の検出状況】

30cmの穴が検出されました。穴は傾斜しており、約60cmの深さでした。穴の壁には樹皮が張りついて残されており、内部からも腐食した木材の出土が見られたことから、この穴は古写真に見られる鳥居倒壊を防ぐために支えとして使用した木材の設置坑と考えられます。東側の礎板周辺には対になるような同様の穴は検出されませんでした。



【石段の検出状況】

ことができます。しかしながら、現時点では非常に部分的な整備でしかなく、今後の整備については、登山道の在り方をしっかりと踏まえた上で計画を考えて進めていかなければなりません。

<当館学芸員 布施 光敏>

▼Information

# 博物館からのお知らせ

## 平成 10 年度 寄託・寄贈 資 料

平成 10 年度、博物館へ寄贈していただいた貴重な資料を紹介いたします。ご協力ありがとうございました。

●寄託資料

・宮下 金光

「御輿休場遺跡 表面採集土器」 一括

●寄贈資料

・梅谷 秀治

「胎内小屋看板」「板マネキ」 計 2 点

・奥脇 国明

「加賀屋奥脇孟之家文書」 一括

・勝俣 譲

「トウミ」「イネコキ」 計 2 点

・奥脇 市治

「ウス」「キネ」 計 2 点

・池谷 富美子

「数珠」「ピッケル」「山菊講社規約」

「五合枅」「駒下駄」他、 計 16 点

・宮下 純一

「モモシキ」「手甲」「ジュバン」

(流鏝馬用) 計 3 点

・柏木 保則

「トウミ」「オウシュウ」他、 計 11 点

[順不同、敬称略]



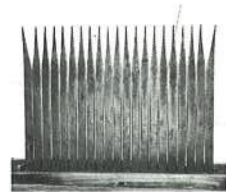
【胎内小屋看板】



【板マネキ】



【モモシキ (流鏝馬用)】



【イネコキ】

### 編集後記

最近、この博物館のエリア内に孔雀が一羽出没するようになりました。鳥のことはよく分かりませんが羽からみてどうやら雌のようです。初めて目撃した時は国道の横断歩道を渡っているところでした。その時は大きな雉だなど思ったのですが、よく見てみると全く違う鳥でした。非常に人懐っこく、よく学芸

の部屋の外までやって来ては餌をおねだりします。おそらくは何処かで飼われていたものだと思います。こここのところ情が移ってきたので、車に轢かれてはいないか、心無い人に食べられたりしていないか、姿を見ない時はずっと心配になる今日このごろです。

(FU)

### ご案内

開館時間 午前 9:30 ~ 午後 5:00 (入館は午後 4:30 まで)

休 館 日 月曜日 (祝日を除く)

祝日の翌日 (日曜・祝日を除く)

12 月 28 日 ~ 翌 1 月 3 日

観 覧 料

大 人 300 円 (240 円)

小中高生 150 円 (120 円)

( ) 内は 20 名以上の団体料金

交通案内 ●中央自動車道河口湖 IC より車で 10 分。

●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面

バス 15 分、サンパークふじ下車。



タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことば「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとされています。

## 富士吉田市歴史民俗博物館

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

〒 403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 2288-1  
TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665  
E-mail marubi@mli.or.jp  
2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒 403-0005  
富士吉田市 ホームページ URL  
http://www.ctty.fujiyoshida.yamanashi.jp/rekishi/hakubutu.html  
発行 平成 11 年 3 月 31 日